

## 「権威についての問答」

(マルコ11:27~33)

挽地茂男

2018.9.30 日本基督教団千歳丘教会

※マルコの本文は最終頁にあります

先週は主イエスによる「宮清め」の出来事を学びました。この宮清めを日本の状況に置き換えてみるとどんな事件だったのでしょうか。過越祭ですから、日本で言えばお正月。例えば成田山新勝寺、日本で3番目に初詣の参拝客の多いお寺です。この成田さんの参道にはたくさんの露天商が立ち並びます。主イエスは、この露天商のお店を片っ端から営業不能な状態にするような、行動を取ったということです。現代の日本では警察沙汰です。現代の日本でない古代ユダヤであっても、大騒ぎになったでしょう。そして、もしユダヤ人の手でこの混乱を沈静化させ治

安が回復しなければ、ローマ当局(進駐軍)の直接介入の可能性もあったのです。

宮清めの事件の後、エルサレムはまだ騒然としていたでしょう。エルサレム全体が、さまざまな目撃情報とそれについての報告と、また醜聞と風説とで沸き返っていたと思われま<sup>ゴシップ</sup>す。そのエルサレムに、一連の騒ぎの当事者である主イエスが、再び、弟子たちと共に姿を現したのです。神殿を監督し、その秩序を守る責任と権威を持つ者たちがやって来ます。…いよいよエルサレムの宗教指導者たちとの直接対決が始まります。



マルコによる福音書11章27節から12章37節には、6つの論

### 第二論争物語集 (11:27-12:37)

- ① 論争1 11:27-33 権威についての問答(論争)——何の権威でこのようなことをしているのか
- ② 論争2 12:1-12 「ぶどう園と農夫」の譬え——指導者たちへの間接的批判。捨てた石が隅の親石
- ③ 論争3 12:13-17 税金についての問答——皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい
- ④ 論争4 12:18-27 復活についての問答——神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ
- ⑤ 論争5 12:28-34 最も重要な掟についての問答——もはや、あえて質問する者はなかった。
- ⑥ 論争6 12:35-37 ダビデの子についての問答——相手なき論争。群衆は教えに喜んで耳を傾けた

争が収められています。一般に「第二論争物語集」と呼びます。この6つの論争のうちの第5番目の論争（第5論争）が終わると、もう、あえて質問する者はなくなりますので、第6論争は相手のない論争となります。それでも主イエスが律法学者の所説を批判する内容になっていますので、論争物語として扱います。

さて今日の第1論争では、「権威」が問題になっています。「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか」（v.28）と、主イエスは詰問されています。かつてガリラヤ宣教を開始された当初の、



人々の反応を憶えておられるでしょうか。ガリラヤ湖畔で4人の漁師たちを弟子にした直後、主イエスの一行はカファルナウムにやって来ます。そして主イエスが会堂で始めると「人々はその教えに非常に驚きます。それは、主イエスが「律法学者のようにではなく、権威ある

者としてお教えになった」（1:22）

からだ、と書かれています。主イエスの権威は、最初から、律法



イエスによる悪霊追放

学者とは対照的なものとして描かれています。具体的な出来事とその権威を実証します。つまり、そのとき会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて、「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」（1:24）と叫び立てますと、主イエスは、その男に取り憑いた霊を叱り、追い出してしまわれます。すると人々は皆驚いて「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く」（1:27）と論じ合います。人々は主イエスの権威を目撃し肌で感じたのです。悪霊に対するその力を目の当たりにして、今まで権威者と呼ばれていた人たちの教えとは違うことを実感したのです。その実感が「権威ある新しい教えだ」という言葉に表現されます。こうして「イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々

にまで広まった」(1:28)のでした。

権威と権力は違います。権威とは、自発的に同意・服従を促すような能力や関係のことを言います。一方、権力は、威嚇や武力によって強制的に同意・服従させる能力・関係のことなのです。また、権威は必ずしも個人に付帯するわけではありません。ある立場・地位のみが権威化され、そのポジションにおかれた個人そのものに権威がともなわない場合もあります。いわゆる権威的な職種に携わる人が、その地位を象徴する職名(肩書き)や制服やバッジを身につける限りは権威を行使できても、そうした装置をひとたび外せば権威が失われるのは、その一例を示しています。

では「主イエスの権威」と「律法学者たちの権威」との違いはどこにあるのでしょうか。ギリシャ語の「権威」という言葉は、〈エクスウーシア ἐξουσία〉という言葉ですが——元々〈いろいろな制約に対して自由な力〉という意味の言葉ですが——実はこの言葉は、二つの言葉からできています。〈エクス ἐξ〉という言葉と〈ウーシア〉という言葉の複合語です。〈エ

クス〉というのは〈～から〉という意味の前置詞です。一方〈ウーシア〉というのは〈存在〉とか〈本質〉と言う意味です。つまり権威とはその人の〈存在〉そのものから出てくるもの、その人の〈本質〉そのものから出てくるもの、ということになります。つまり主イエスの権威とは、イエスという存在そのものから出てくるもの、イエスの本質そのものから出てくるものということになります。**主イエスの権威とは、主イエス〔また神〕の存在(=本質)そのものが持つ力なのです。人間力、ならぬ、主イエスの存在の力なのです。**

このことを頭に置いておくと、初期の宣教活動において主イエスが「**律法学者のようにではなく**」(1:22) 教えられたということが、大切な意味を持ってきます。律法



学者は当時の宗教や道德に関しては、ユダヤ人社会における権威でした。しかしその権威は、

第1に、主イエスの権威がその内から、存在そのものから出てくるのに対して、①**外在的権威**、つま

りその人の内からではなく、律法という自分の外にある権威に依存することによって成り立っている権威なのです—その権威を彼らは時として振り回すのです。それは、彼らの存在そのものから、本質そのものから出てくるものではないのです。律法という権威によって成り立っている権威なのです。そしてその権威は外に依存する外在的な権威ですから、当然自律的ではなく、第2に、②**他律的な権威**なのです。会社や組織において、権威ある立場や地位や役職に就いている人たちが、定年を迎えたり、その立場を退くと、突如として人々の尊敬を失ってしまうことがあります〔激しい嘲笑の的になる人もいます〕。その権威が、制度上の地位や役職によって他律的にまた外在的に備えられた権威だったからです。人々は組織上の地位に敬意を払っていたのです。それは肩書きに付随する権威なのです。ですからそれは、第3に、制度によって保証される権威、③**制度的な権威**なのです。祭祀制度、神殿制度、彼らは自分の内側に権威を持たないから、それらの制度に対する批判や変更を容易に受容

しないのです。結果として彼らは、律法の文言を墨守し、制度やシステムを頑なに維持し、逸脱者や異を唱える者に対し徹底した敵対意識をもち、自分たちの権威に対する脅威を排除するために躍起になるのです。

主イエスが〈**権威ある新しい教え**を語る者として〉教えられたとき、それは肩書きなどに見る既成の権威を指しているのではないのです。彼には何の肩書きもないのです。ナザレの〈大工の小せがれ〉に過ぎなかったのです。彼の権威は、わたしは神の子であるからわたしに従えと、人々に強圧的に従順を迫る権威(権力)ではなくて、新任教師が徐々に生徒の信頼を勝ち取っていくように、主イエスご自身がその存在と生涯を懸けて勝ち取っていくということになるのです。しかも愛によって勝ち取られた権威こそ、主イエスの権威なのです。真の権威とは、元来その



ような性質のものなのです。

主イエスが〈**権威ある新しい教え**を語る者として〉登場した場面には、悪霊追放が続いています。この出来事から、主イエスの権威が霊的な性質〔起源〕を持っていることが分かります。ここで真の権威が神の領域に結びついていることが分かります。真の権威は神が立てるものなのです。イエスと汚れた霊に取り憑かれていた男〔実際は汚れた霊〕との不思議な問答がそれを教えています。

「1:23 そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。1:24 「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」真の権威は神によって立てられ、霊の賜物によって支えられているのです。牧師や司祭(聖職者)が按手礼を受けるのは、その務めが神の与える霊的な賜物によって遂行されなければならないことを意味します。霊的存在は〔悪霊であれ〕、権威に霊的な実質がともなうことを知っているのです。宗教指導者たちは主イエスに対して「**何の権威で、このようなことをしているのか**」と尋

ねました。彼らには、悪霊には見えている、主イエスの権威が見えないのです。民衆に実感される主イエスの権威が彼らには感じられないのです。

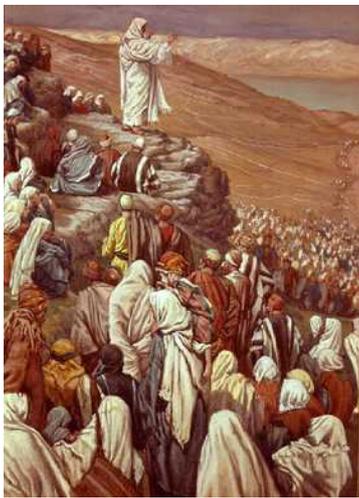
さてエルサレムでの衝突には、前史と言いましょいか、それに至るまでの過程があります。それは人々が、主イエスの教えを「**権威ある新しい教えだ**」と言いだしたそのときから始まっています。主イエスの宣教活動が始まるとほぼ同時です。「**権威ある新しい教えだ**」という人々の評判を耳にしたとき、これまで権威者とされてき



た者たちの心は穏やかではありませんでした。

この既存の権威者たちは、新しい権威として登場した主イエスを目の敵にし始めます。やがて新旧の権威は激しい論争に突入していきます。主イエスと律法学者およびファリサイ派の人々との論争が、「**第一論争物語集**」(2:1-3:6)に記されています。ここには、5つの論争がおさめられています。それらの論争によって主イエスが、

これまで権威者とされていた人たち、すなわち律法学者やファリサイ派の人々を論破すると、「ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた」(3:6)のでした。すでに殺意が芽生えています。しかし主イエスを亡き者にしようとする律法学者やファリサイ派やそして



ヘロデ派の人々を尻目に、その評判は、「3:7 ガリラヤ…ユダヤ、3:8 エルサレム、イドマヤ、ヨルダン川の向こう側、ティルスやシドンの辺り」まで、つまりイスラエルの国内全土のみならず外地（ティルス、シドン＝フェニキアの都市）にまでも達し、そこから、つまり外地を含めた全国の津々浦々から「おびただしい群衆が、イエスのしておられることを残らず聞いて、そばに集まって来」るほどになります。今上げた地名のリストの中に「エルサレム」が含まれていることに注意し

たいと思います。この〔まだ3章の〕時点で、主イエスの評判がエルサレムにまで届いていたのです。福音書を読むと主イエスが徐々にエルサレムに近づいて行く姿を見ることができるのですが、実は一方で、エルサレムも——つまりエルサレムの律法学者やファリサイ人も——少しずつ、徐々に主イエスとの距離を(間合いを)詰めつつあったのです。要するに、主イエスとエルサレムの宗教指導者たちとの衝突は、主イエスの宣教のかなり早い段階から、すでに準備されつつあった、と言えます。

そしてついに、エルサレムから律法学者たちがガリラヤで活動を続ける主イエスの許にやってまいります。あの「ベルゼブル論争」です。3章22節。3:22 エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭で悪霊を追い出している」と言っていた。ここに言う「エ



ルサレムから下って来た律法学者たち」(v.22)とは、エルサレムから派遣され

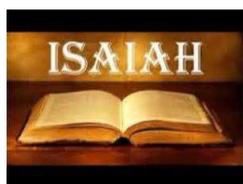
た監視団か、このような宗教問題に関する権威筋かと思われませんが、はっきり分かりません。しかし100Km以上もあるエルサレムからガリラヤまでの距離を旅してやって来るほど、「イエス問題」が重要な問題になっていたことは確かです。



7章にも、エルサレムからやってきた宗教指導者たち

が出てきます。7章1節。「7:1

ファリサイ派の人々と数人の律法学者たちが、エルサレムから来て、イエスのもとに集まった。」「不浄論争」(7:1-23)です。弟子たちが洗わない汚れた手で食事していると、彼らは主イエスに向かって、「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか」(7:5)と詰め寄ります。一方、主イエスは彼らの偽善を見抜いて、



「イザヤは、あなたたちのような偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書いている。『この民は口先ではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠

く離れている。7:7 人間の戒めを教えとしておしえ、／むなしくわたしをあがめている。』7:8あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている」(7:6-9)と切り返します。彼らの偽善とは、神から遠く離れた心で、表面的な宗教性を装い、口先で敬虔を語ることなのです。そして汚れの所在を明らかにします。「7:15 外から人の体に入るもの〔=食物〕で人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである」(7:15)。汚れの問題は、手を洗ったかどうか、というような外面的な問題ではなく、内面のつまり心の問題なのです。「人から出て来るものこそ、人を汚す。7:21中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、7:22 姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、7:23これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである」(7:20-23)と言い放ちます。この言葉は、ファリサイ人たちの隠れた殺意を暗に指摘しています。心に「殺意」を秘めたものが、「手の汚れ」を語っているのです。

主イエスがエルサレムを目指し



エルサレム入城



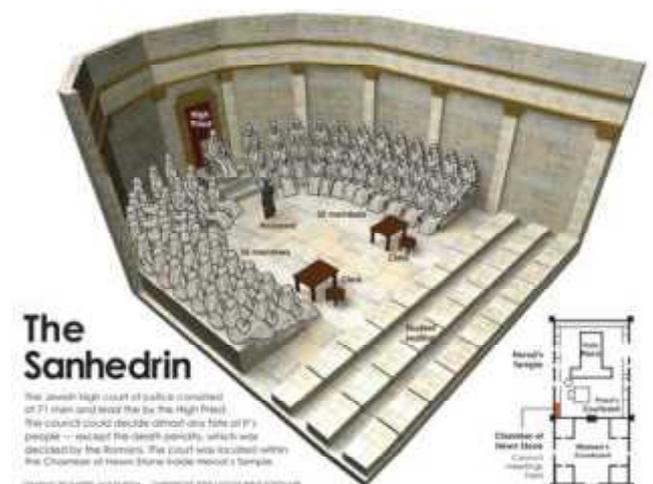
イエスの宮清め

たとき、そこ（エルサレム）で彼を待っている事態は大方予想することが可能だったでしょう。おまけに群衆に  
はや  
囃し立てられてエルサレムに入城した翌日には、神殿の通常の営みを破壊するような行動に打って出て、神殿市場から得られる宗教指導者たちの消費者経済的利害を侵食したのですから。宗教指導者たちは、イエスを取り巻く群衆を恐れて手出しはできませんでしたが、怒りは心頭に達し、殺意は決意に変化していたのでした。神殿境内であのようなことをしでかしたにもかかわらず、イエスが再びエルサレム神殿の境内に現れた、



との報告があったのでしょう、エルサレムの重鎮たちがイエスの許にやってまいりました。27節。11:27 一行はまたエルサレムに来た。イエスが神殿の境内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちがやって来て……

やって来たのは祭司長、律法学者、長老でした。祭司長、律法学者、長老とはエルサレムの<sup>サンヘドリン</sup>議会（最高法院）を構成する主要な3グループをさしています。<sup>サンヘドリン</sup>議会（最高法院）は、ローマ帝国支配下のユダヤにおける最高裁判権を持った宗教的・政治的自治組織で、71人のメンバーで構成されます。その内の一人が議長、もう一人が副議長を務め、他の69人が議員をつとめます。エルサレム（イスラエル）で最高の権威を持つ人たちが、主イエスの権威について問いただします。28節。11:28（祭



司長、律法学者、長老たちがやって来て、) 言った。「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか。」主イエスの権威は、1世紀のユダヤ教のすべての人にとって周知の公職者（祭司長、律法学者、長老）からの挑戦を受けます。

「何の権威で、このようなことをしているのか。」彼らの質問に対して、主イエスは答えずに、問い返します。29－30節。

11:29 イエスは言われた。「では、一つ尋ねるから、それに答えなさい。



い。そうしたら、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。11:30 ヨハネの洗礼は天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。答えなさい。」

この主イエスと宗教指導者たちの論争は、わたしたちに、信仰が目的とされるよりは、信仰が手段となる時に生じる、信仰の危険な性質について教えてくれます。神の任命を受けて神とイスラエルの間の契約に仕えるはずのこれらの聖

職者(宗教指導者)たちは、その働きへと神が召された自分たちの召命を、自分自身のために私的な事業に歪曲してしまったのです。その歪曲は1世代のことではなく、もう長い年月に亘っていたでしょう。それゆえ神に託された神の僕としての権威は、制度的で、外在的で、他律的な権威として空洞化してしまったのです。生ける神の僕となるように選ばれたこれらの指導者たち——自己の利益に固執せず、いかなる犠牲を払っても神の御前に正しいことを行うように召された人たち——は、正反対のものになってしまったのです。彼らは神と人間の生きた関係を箱詰めにして、それらを売って、彼らの神殿経済共同体の「法人利益」を稼ぎ出しているのです。彼らは、この職業的な神殿複合企業体の有能な「理事」となってしまったのです。自分たちの利益のみを追求する制度化という誘惑に屈したのです。

イエスの質問を受けて、彼らは動揺します。資本主義的な打算的動揺と言っても良いかもしれません。31－32節。

11:31 彼らは論じ合った。「『天か

らのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。11:32 しかし、『人からのものだ』と言えば……。」  
彼らは群衆が怖かった。皆が、ヨハネは本当に預言者だと思っていたからである。



「もし我々がAと言えば、相手が優位になる。しかしながら、もし我々がBと言えば、我々に対する民衆の信望はがた落ちになる。」打算が彼らの頭を巡ります。彼ら思索と判断は、神中心ではなく人間中心です。真実よりも利害が優先します。もはや彼らは聖職者ではなくて、大衆迎合主義的な(Populist)事業家なのです。宗教家なのでなく、宗教屋なのです。彼らは人々の信仰の存続のために制度を運営しているのではないのです。彼らは、制度の存続のために、人々の信仰を管理しているのです。

主イエスにとって権威とは、神との関係によってなり、人に謙虚に仕えるものとして存在するのです。「ヨハネの洗礼は天からのもの

のだったか、それとも、人からのものだったか。」主イエスの質問は本質的に、ヨハネの神との関係についての質問であって、一つの制度の設立者としてのヨハネの身分についての質問ではありませんでした。

宗教指導者たち（神殿複合企業体の理事会の理事たち）は、イエスの質問によって彼らの権威の質をあぶり出されてしまいます。自分の内側に権威を持たない彼らの答えは、当然こうなるのです。「わかりません」(v.33)。33節を読んでおきましょう。

11:33 そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスは言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

皮肉にも、宗教指導者たちの唯一の選択肢は、自分たちが権威を持っていないことを告白することでした。「わたしたちには分かりません。」彼らは宗教的・霊的な事柄を判断することができないのです。「分かりません。」仮に主イエスが「このようなことをするのは、神の権威によるのだ」と言っても、その言葉の真価を見極めることが

できないのです。主イエスの権威を吟味する資格がないことを、自ら認めたのです。ここに至ってユダヤの最高法院は、真の権威を持たない権威者として現れています。主イエスは、権威をもつことにまったく関心をもたない真の権威者として現れているのです。

エルサレム神殿は、その造営の当初から、その存在に否定的な見方が出ていました。預言者たちも神殿批判を繰り返しました。それは建造物と資産をバックにして成立した組織が、制度化・形骸化を免れないからなのです。使徒言行録7章46-53節を読んでおきます。

7:46 **ダビデは神の御心に適い、ヤコブの家のために神の住まい(神殿)が欲しいと願っていましたが、7:47神のために家(神殿)を建てたのはソロモンでした。7:48けれども、いと高き方は人の手で**



エルサレム炎上 David Roberts, "Siege and Destruction of Jerusalem," (1850)

**造ったようなものにはお住みになりません。**これは、預言者も言っているとおりで。7:49 『主は言われる。「天はわたしの王座、／地はわたしの足台。お前たちは、わたしに／どんな家を建ててくれると言うのか。わたしの憩う場所はどこにあるのか。7:50 これら(被造物)はすべて、／わたしの手が造ったものではないか。』7:51 **かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。7:52 いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、一人でもいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを預言した人々を殺しました。そして今や、あなたがたがその方を裏切る者、殺す者となった。7:53 天使たちを通して律法を受けた者なのに、それを守りませんでした。」**

**パウロは、「わたしたちの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、だから、自分の体をもって神の栄光を現しなさい」(1コリ3:16-17,6:19-20)と語**

りました。主がわたしたちに求めておられることは、わたしたちこそが主の神殿として、主ご自身をお迎えすることなのです。そして主は、わたしたちが神の「祈りの家」として祈りと賛美が絶やさず、神が創り生かしてくださるわたしたちの生命という存在(本質)そのものから、聖霊を通して生じる実を实らせる(いちじくの)木となることを望んでおられ、そのための恵みと力を備えてくださるのです。その果実こそ神の栄光なのです。新しい一週間も主と共に歩んでまいりましょう。祈ります。

2018.9.30 日本基督教団千歳丘教会



11:27 一行はまたエルサレムに来た。イエスが神殿の境内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちがやって来て、

11:28 言った。「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか。」

11:29 イエスは言われた。「では、一つ尋ねるから、それに答えなさい。そうしたら、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。

11:30 ヨハネの洗礼は天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。答えなさい。」

11:31 彼らは論じ合った。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。

11:32 しかし、『人からのものだ』と言えば……。」彼らは群衆が怖かった。皆が、ヨハネは本当に預言者だと思っていたからである。

11:33 そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスは言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

11·27 Καὶ ἔρχονται πάλιν εἰς Ἱεροσόλυμα. καὶ ἐν τῷ ἱερῷ περιπατοῦντος αὐτοῦ ἔρχονται πρὸς αὐτὸν οἱ ἀρχιερεῖς καὶ οἱ γραμματεῖς καὶ οἱ πρεσβύτεροι

11·28 καὶ ἔλεγον αὐτῷ, Ἐν ποίᾳ ἐξουσίᾳ ταῦτα ποιεῖς; ἢ τίς σοι ἔδωκεν τὴν ἐξουσίαν ταύτην ἵνα ταῦτα ποιῆς;

11·29 ὁ δὲ Ἰησοῦς εἰαυτοῖς, Ἐπερωτήσω ὑμᾶς ἓνα λόγον, καὶ ἀποκρίθητέ μοι καὶ ἐρῶ ὑμῖν ἐν ποίᾳ ἐξουσίᾳ ταῦτα ποιῶ·

11·30 τὸ βάπτισμα τὸ Ἰωάννου ἐξ οὐρανοῦ ἢ ἐξ ἀνθρώπων; ἀποκρίθητέ μοι.

11·31 καὶ διελογίζοντο πρὸς ἑαυτοὺς λέγοντες, Ἐὰν εἴπωμεν, Ἐξ οὐρανοῦ, ἐρεῖ, Διὰ τί (ου) οὐκ ἐπιστεύσατε αὐτῷ;

11·32 ἀλλὰ εἴπωμεν, Ἐξ ἀνθρώπων; ἐφοβοῦντο τὸν ὄχλον· ἅπαντες γὰρ εἶπὸν Ἰωάννην ὄντως ὅτι προφήτης ἦν.

11·33 καὶ ἀποκριθέντες τῷ Ἰησοῦ λέγουσιν, Οὐκ οἶδαμεν. καὶ ὁ Ἰησοῦς λέγει αὐτοῖς, Οὐδὲ ἐγὼ λέγω ὑμῖν ἐν ποίᾳ ἐξουσίᾳ ταῦτα ποιῶ.